

比較語彙研究の意義とその可能性

申 玟 澈*

目 次

0. はじめに
 1. 語彙の數量的側面
 2. 語彙の品詞別構成
 3. 語彙の語種別構成
 4. 意味分野別構造分析法による語彙の比較
 - 4.1 比較対象語彙および語彙調査の結果
 - 4.2 コード付けの基準と意味分野別構造分析法
 - 4.3 意味分野別構造分析
 5. おわりに
-

0. はじめに

語彙とは、形態と意味との結合の上に成り立つ存在である、個々の語が集まって構成される集合体である。このことから、語彙にはその基本的性格として意味的側面と數量的側面があることが分かる。このような語彙を対象とする學問分野が語彙論であるが、一口に語彙論と言っても、それが扱う対象によって、個々の語を対象にする場合とその集合を対象にする場合とに分けて考えることが出来る。比較語彙研究では、前者を「語彙元素論」、後者を「語彙總体論」として區別しており、その主な關心は語彙總体論にある(田島毓堂1992)。

さて、今までの語彙研究の流れを見ると、語彙の片方の側面にのみ注目してきたのが事實である。つまり、従來の語彙總体論的研究では、その主たる關心が何らかの意味での基本的な語彙の選定にあり、その尺度としては主に異なり、延べ、使用率などといった語彙の數量的側面が用いられ、意味は捨象されるのが一般的であった。一方、語彙元素論では、大きく分けて、語の意味・用法の歴史の変遷を記述する「語誌」と語の構成原理の究明を目的とする「語構成論」の研究がなされるので、意味に關心が向けられるのであるが、こ

* 韓南大學校 專任講師 日本語學

れらはいくまでも語彙の要素の研究であって、文字通り語の集合としての語彙の研究ではない。

そこで、本稿では、先ず従來の語彙總体論の観点(數量的側面、語彙の品詞別・語種別構成)から何が明らかに出来るか、また、それを言語間の語彙の比較研究に適用した場合の限界などについて指摘し、語彙同士の比較において、語彙の數量的側面と意味的側面の両方を活かせる分析法としての、「意味分野別構造分析法」¹⁾を用いる比較語彙研究の意義とその可能性について述べてみたいと思う。

1. 語彙の數量的側面

20世紀に入ってから、アメリカを始めとする色々な國で、聖書、文學作品、新聞、雑誌、教科書などといった言語資料を對象として大規模の語彙調査が行われるようになる。その目的としては、先ず讀書教育に必要な語彙の選定、基本語彙の選定などのような教育的な目的が挙げられる。その他に、辭書の編集や各種の言語情報處理(機械翻譯・自動抄録・情報検索など)に必要な語彙テーブル作成のためにも語彙調査が行われる(田中章夫1978)。

基本語彙は語の使用頻度やその分布に基づいて選定されるものであるが、語の使用頻度は語彙調査によってのみ求められる。語彙調査を行うと、語ごとに何回使われたかという頻度が求められ、頻度の高い語から低い語への順に並べると、ある言語において基本度の高い語が上位に位置するようになる。このように、使用頻度のような語彙の數量的側面は語の基本度を計る尺度として用いられるものであるが、その他にも、語彙の數量的側面からは「Zipfの法則」に代表される語彙の一般的特徴が明らかになっている。

Zipfの法則とは、使用率と語数との相關關係を示すもので、どのような語彙も、使用率の極めて高い少數の語と、多數の低頻度語およびただ一回しか使われない最低頻度語から成るということである。これは「使用頻度×頻度順位=不変數($P \times r = \text{constant}$)」のように定式化される。なお、使用率と語数との關係をグラフに示すと、タテ軸が累積使用率、ヨコ軸が異なり語数の場合は逆L字型、タテ軸が異なり語数、ヨコ軸が頻度の場合はL字型になる²⁾。

1) 阪倉篤義(1960)により始まり、淺見徹(1971)によって継承された語彙分析法で、田島毓堂(1992)において「意味構造分析法」と命名されたが、その後、湯淺茂雄氏の提案により「意味分野別構造分析法(The Structural Analysis of Vocabulary with Special Referring to Semantic Categories)」と称するようになった。

2) 實際のグラフは、田中章夫(1978)『國語語彙論』明治書院、pp.34~35参照。

このように、語彙の數量的側面は、基本語彙を選定するために用いられたり、語彙の一般の特徴を示したりするものではあるが、語彙同士の比較、特に言語間の語彙の比較を數量的側面のみから行っても大した意味は持たないのである。

2. 語彙の品詞別構成

語彙の品詞別構成は文体と関係がある。これを明らかにした研究としては、樺島忠夫(1954・1955)と大野晋(1956)がある。樺島忠夫氏は、自立語のみを對象として現代文における品詞の割合を調査した結果から、文の種類によって各品詞の割合に差が見られ、名詞の百分率が分かれば、他の品詞の割合が算出できると述べている(「樺島の法則」)。なお、大野晋氏は、古語に對して、万葉集・枕草子・源氏物語・徒然草・土佐日記・竹取物語・紫式部日記・讃岐典侍日記・方丈記の古典九作品の語彙(助詞・助動詞は除外)の品詞別構成から、ジャンルによって名詞の比率が変わると述べている(「大野の法則」)。

しかし、言語によって、その構造上の特徴に基づき、それぞれ品詞分類を異にしているので、語彙の品詞別構成と文体との間に見られる規則性は言語ごとに見出すのが適切であるといえよう。

一方、韓國語の方では、유안기(1990)が語彙に品詞分類を施した分析を行っている。유안기(1990)では、10種類の語彙資料を對象として各々の品詞別構成比を調査し、それを分析してみた結果、名詞の割合が最も高く、その次は動詞、形容詞、副詞の順で、冠形詞、感嘆詞、代名詞、數詞の割合は僅かである、という傾向が見られると述べている。しかし、『図説日本語』(p.80)を見ると、このような傾向は色々な言語において類似していることが分かる。

したがって、語彙の品詞別構成も言語間の語彙の比較研究に有効な観点であるとはいえない。

3. 語彙の語種別構成

語種とは語の出自のことで、普通、固有語(日本語では和語)・漢語・外來語・混種語に分けられる。このような語種に基づいて語彙を分類してみると、ある言語がどれくらいの外來要素の影響を受けているかが分かる。

金光海(1989)と佐藤亨(1993)によると、韓日兩言語では、使用頻度の高い、基本的な語

においては固有語が漢語より優勢であり、頻度が低くなるにつれ、漢語の割合が次第に高くなるのが共通している。

実際に、韓国語と日本語との比較語彙研究のために、それぞれの言語において最も基本的といえる語彙として選定した「小學生基本語彙」³⁾における語種別構成を示すと、次の【表1】の通りである。

【表1】「小學生基本語彙」の語種別構成

語種	韓国語		日本語	
	語数	割合	語数	割合
固有語	2285	54.9	2359	57.1
漢語	1373	33.0	1421	34.4
外來語	57	1.4	209	5.1
混種語	444	10.7	144	3.5
合計	4159	100.0	4133	100.0

【表1】を見ると、語種別の割合に若干の差はあるものの、韓国語と日本語の語種別構成自体はかなり類似している。なお、漢語が3割以上であることを見ると、韓日両言語とも漢語の影響を強く受けていることが分かる。一方、外來語の割合は微々たるものであるが、これにはその流入の歴史が浅いことが関係していると思われる。

このように、語彙の語種別構成からは外來要素の影響の度合いが指摘できるのであるが、言語間の語彙の比較にそれを適用してもその程度の差が分かるのみで、それ以上のことを指摘するには無理がある。

4. 意味分野別構造分析法による語彙の比較

4.1 比較対象語彙および語彙調査の結果

本稿では、黒柳徹子著の『窓ぎわのトットちゃん』(講談社文庫、1984)と김난주によるその韓国語譯『창가의 토토』(프로메테우스 출판사, 2000)をテキストとして用い、それを対象とした語彙調査の結果、得られる語彙を対象として比較を行うことにする。『窓ぎわのトットちゃん』は巻1～巻61の本文と「あとがき」から成るが、「あとがき」は語彙調査の對

3) 「小學生基本語彙」を選定するために用いた資料および選定の基準などについては、申玟澈(2001)を参照されたい。

象から除外する。

語彙調査には全数調査と抽出調査(「サンプリング調査」とも)があるが、全数調査を行うことにする。なお、その基準としては日本語は文節、韓国語は語節をそれぞれ用いることにし、その理由については以下に述べる。

文節は〈文を実際の言語としてできるだけ多く区切った最短の一區切り〉であり、その前後に音の切れ目を置くことが出来る(『日本語学辞典』p.147参照)。このように、文節は音聲言語に基づいた言語単位であるため、文節に分けることは割合容易であり、田島毓堂氏の學生を対象とした実験からも明らかのように、人による揺れも少ない、割合安定した単位である(田島毓堂1986)。一方、日本語の文節にほぼ相当する単位として韓国語には「語節」がある。語節は、系列関係と統合関係によって分けられる一纏まりの語で、分かち書きの基準にもなる。なお、発音の時は、語節単位に切って発音することが出来る(남기심・고영근1985)。

よって、日本語の文節と韓国語の語節を基準にして語彙調査を行うと、語彙調査の容易さと単位の統一という条件を同時に満たすことが出来る。実際の語彙調査においては、文節や語節に区切った後、その中を自立語と付屬語に分け、それぞれを一単位とするのである。ただし、本稿では自立語のみを対象とする。

自立語の内訳を示すと、韓国語は異なり4718語・延べ33047語、日本語は異なり3882語・延べ28691語である。

4.2 コード付けの基準と意味分野別構造分析法

意味分野別構造分析を行うためには、語彙の構成要素である個々の語に意味コードを与えなければならない。比較語彙研究で用いるコードには単語コード(WC : Word Code)と語素コード(LC : Lexeme Code)の二種類のコードがある。各々のコードは基本的に『分類語彙表』に依るものであるが、単語コードは単純語・複合語を問わず1語として付けるコード(1語1コード)であり、語素コードは語の構成要素ごとに付けるコードである。つまり、「そよ風 - WC 1.5151/LC1 3.5039 LC2 1.5151」のようにである。

なお、比較語彙研究では、〈言語のすべての要素(当面は文字として固定できるもの)が語彙論の観点から見れば語彙の要素である〉という考えから、自立語だけでなく付屬語も語彙に含めるべきであると考えられる。しかし、『分類語彙表』には一部の付屬語しか収録されていないので、それに對しては田島毓堂・廣瀬英史(1997)において新設されたコードを用いている。

さらに詳細なコード付けの基準については、コード付けの基本方針とその基準が詳しく述べられている田島毓堂(2000)と、それを参考にして、韓国語と日本語との比較語彙研

究のためのコード付けの基準について述べた申政徹（2001）を参照していただきたい。

コード付けの基準にしたがって個々の語に与えたコード（「単語コード」と「語素コード」）を集計し、どのような意味分野の語が、どんな割合で語彙が構成されているかを手掛かりにして、語彙同士を比較する。その結果、差が生じている意味分野に対して、その原因を考察する。これが意味分野別構造分析のあらましであるが、集計の対象であるコードはほぼ『分類語彙表』に依據しており、そのコードは品詞論的な分類を表わす整数部分（1～4）と意味分野を表わす小数部分（2～4桁）から成っているのので、分析の際、コードの小数点以下何桁まで用いるかによって、先ず4種類の意味分野別構造分析法が考えられる。

廣瀬英史（2000）では、コードの用い方を基準に、先行研究における意味分野別構造分析法を、「部門別意味分野別構造分析法」（小数第1位まで）、「グループ別意味分野別構造分析法」（浅見徹1971の表による分類）、「中項目別意味分野別構造分析法」（小数第2位まで）、「コード別意味分野別構造分析法」（小数第4位まで）、「擴大意味分野別構造分析法」（語素コードによる分析）の5種類に分け、各分析法の特徴について述べている。

廣瀬氏は、比較語彙研究に最も適した分析法は「擴大意味分野別構造分析法」であり、全体的傾向を捉えるのに適した分析法は「部門別・グループ別・中項目別意味分野別構造分析法」であるが、中でも「中項目別意味分野別構造分析法」が他よりは詳細に語彙の特徴を掴むことの出来る分析法であると述べている。なお、「コード別意味分野別構造分析法」は分類が細かいため、全体的傾向を見るには不向きであるが、差の原因である語を探るという点においては最も優れた分析法であると述べている。

一方、意味分野別構造分析における差の指摘は、客観的に差を指摘できる統計技法である χ^2 自乗検定法によって行う。ただし、心理学や医学の分野では、5%以下の危険率までを有意の差と認めるのであるが、言語研究においては、10%以下の危険率、言い換えれば90%以上の確率で有意差があると認められるものは、差として捉えても差し支えないと思われる。

4.3 意味分野別構造分析

本稿では、紙幅の制約もあり、上記の色々な意味分野別構造分析を全部試みることは出来ない。そこで、ある程度詳細に語彙の特徴が掴める中項目別意味分野別構造分析を行ってみることにする。

分析の結果、 χ^2 自乗検定により10%以下の危険率で有意の差があると認められた、異なり単位と延べ単位のそれぞれの項目を示すと、次の【表2】と【表3】の通りである。

【表2】 異なり単位(12項目)

危険率	韓国語が有意に大			日本語が有意に大		
0.1%以下	3.10(72:24)	3.16(125:50)	3.19(193:102)	1.15(30:54)		
1%以下				4.33(4:15)	15(110:130)	
5%以下	3.15(71:38)			4.30(12:24)		
10%以下	1.20(82:48)	2.34(28:12)		1.18(37:47)	10(28:36)	

*()の中は韓国語 日本語の単位数

【表3】 延べ単位(45項目)

危険率	韓国語が有意に大			日本語が有意に大		
0.1%以下	1.11(307:136)	1.16(1244:934)		1.15(46:76)	1.17(928:1078)	
	1.19(868:449)	1.20(1329:752)		1.21(466:772)	1.24(665:715)	
	1.25(167:51)	1.30(995:606)		1.40(16:119)	2.12(765:791)	
	1.31(504:296)	1.33(458:286)		2.13(41:98)	2.30(1590:1614)	
	1.50(227:131)	2.15(2606:2059)		2.31(685:839)	3.13(409:481)	
	2.32(50:6)	3.10(1384:1055)		4.30(34:68)	4.33(21:53)	
	3.11(439:234)	3.12(557:261)		15(1689:1712)	20(99:422)	
	3.16(957:645)	4.31(359:196)				
1%以下	1.36(92:50)	1.57(736:734)	3.31(30:8)			
	3.58(35:12)					
5%以下	3.30(491:486)			1.26(352:366)	1.44(394:394)	1.46(162:178)
				2.16(18:31)	2.19(3:11)	
10%以下	2.36(107:68)	2.38(149:102)	3.19(1528:1237)	1.38(36:49)	1.56(131:140)	

*()の中は韓国語 日本語の単位数

上記の【表2】と【表3】の異なり単位と延べ単位のそれぞれにおいて有意差の生じた項目を見てみると、〈1.18〉(形・姿)、〈2.34〉(行爲・失敗)、〈3.15〉(変化・動き)、〈1.0〉(補助用言)の4つの意味分野では異なり単位においてのみ、〈1.11〉(類・関係)、〈1.16〉(位置・時間)、〈1.17〉(空間・場所)、〈1.21〉(家族・親戚)の他33の意味分野では延べ単位においてのみそれぞれ有意差が生じている。原論的な話になるが、異なりとはそれぞれの意味分野に属する語の種類のことであり、延べとはそういった語の度数の合計である。このことから、各意味分野の所屬語に度数(使用率)の高い語が多く含まれているか否かによって、延べ単位における差が縮まったり広まったりするのであるといえる。

異なり単位と延べ単位の片方の分析においてのみ有意差の生じた意味分野についてはこれくらいに留め、以下においては、紙幅の制約もあるので、両方の分析において有意差の

生じた8つの項目(【表2】と【表3】における■の項目)のうち、特に韓国語と日本語の構造的な違いが見られた幾つかの意味分野について詳しく述べてみることにする。

(1) 〈3.10〉 (こそあど) - 韓国語が有意に大

この意味分野では、韓国語に「이·그·저·어느(こ・そ・あ・ど)」から形成された語が多く含まれているため差が生じているが、韓国語には日本語にはない「그리(そちらへ)、저리(あちらへ)」などのような方向を表わす指示副詞があるのが特徴である。この指示副詞は、次の例のように、状態を表わす場合にも用いられる。

a. 긴 갑에 든 캐러멜이 10 전이었으므로 그리 큰 돈은 아니었지만
(長い箱に入ったキャラメルが、十銭だったから、そう大変なお金じゃないけど)

なお、韓国語には、「이·그·저·어느(こ・そ・あ・ど)」と語形の繋がりはないが、意味の上で関係のある語として「무슨(何の)、웬(どうした)、아무렇다(どうだ)、아무리(どんなに)」のような語が含まれている。「무슨(何の)」と「웬(どうした)」は共に疑問を表わす指示冠形詞(冠形詞は日本語の連体詞に相当)である。そのうち、「웬」の語源は明らかにされていないが、「무슨」についてはその成立過程が明らかにされている。「무슨」は現代語では冠形詞の機能しか持たないが、中世韓国語(10世紀初～16世紀末)においては「므스、므스、므슴、므스」の4形態があり、「므스」以外の一つの名詞として現代語の무엇(何)と同じ機能をしていたことが報告されている。それが形態上の変化を経て、冠形詞の機能のみを担うようになったのである(김광해1995)。そのため、日本語では「何の」という2語から成る句で表わされることを韓国語では「무슨」1語で表わすことが出来るのである。

次に、「아무렇다(どうだ)」と「아무리(どんなに)」はそれぞれ不定の意味を表わす指示形容詞と指示副詞である。

b. 그 귀엽던 병아리가 죽었을 때도, 아무리 불러도 병아리는 꿈쩍도 하지 않았었다.
(あの可愛がってた、ひよこだって、死んだら、もう、どんなに呼んでも、動かなかったんだから。)

上記の例のように、日本語では「ど」系列の語が不定の意味も表わせるのに對して、韓国語の「어느」系列の語は性質や状態の意味しか表わさない、といった違いが見られる。

また、この意味分野の韓国語には、「내(僕の)、제(私の)、네(君の)」のように、人称と関わりのある冠形詞があるのが特徴である。

(2) <3.19> (量・過不足・程度) - 韓国語が有意に大

この意味分野では、韓国語に‘길다・길다랗다・길쭉하다(長い)、넓다・넓적하다(広い)、높다・높다랗다(高い)、얕다・얕트막하다(浅い)、짧다・짧막하다(短い)、가늘다・가느다랗다(細い)、작다・작그마하다・조그맣다・조그마하다(小さい)、크다・커다랗다(大きい)、늦다・느릿하다(遅い)’のような語が含まれている。これを見ると、形容詞において、微妙に語感を異にする語が多く形成されているのが韓国語の特徴であるといえよう。

また、韓国語には形容詞から派生した副詞として、‘가까이(<가깝다:近く)、높이(<높다:高く)、멀리(<멀다:遠く)、급히(<급하다:急に)、빨리(<빠르다:速く)、많이(<많다:多く)、충분히(<충분하다:充分に)’のような語が入っているが、その語尾が一定していないので、韓国語ではこのような副詞も語彙項目として提示する必要があるのである。一方、日本語の場合は、形容詞や形容動詞から副詞を派生させる方法は割合簡単であり、かつ、一定しているので、そういった副詞を語彙項目として一々挙げる必要はないと考えられる。

なお、韓国語に‘한(一)、두(二)、세(三)、두세(三四)、네(四)、쉰(五十)’などのような数冠形詞があるのが特徴である。

(3) <1.15> (作用・動き) - 日本語が有意に大

この意味分野に属する日本語には、‘変わり、お止し、入れ違い、續き、動き、弾み、成り行き、突き当たり、お滑り、流れ、お連れ、お出で、お歸り、歸り、追い出し、上げ下ろし、お降り、差し障り、摺り切れ、打ち壊し、伸び’などのような、動詞から派生した名詞が多く含まれている。一方、韓国語には動詞から派生した名詞が‘움짐임(動き)、흐름(流れ)’2語のみで非常に少ない。韓国語の場合、「動詞の語幹+ㅁ/ㅡ음(名詞化接尾辭)」または「動詞の語幹+기(名詞化接尾辭)」の構造で動詞から名詞が派生されるのであるが、日本語の場合は比較的単純で、動詞の連用形がそのまま名詞として機能し得る特徴を持っており、そのため、動詞からの派生名詞が形成されやすいと考えられる。

(4) <1.20> (自他・人間) - 韓国語が有意に大

この意味分野では、韓国語に主格助詞‘가(が)’の前にしか現われない‘나(僕)、저(私)、네(君)’があるのが特徴であり、これらの人称代名詞は‘가(が)’以外の助詞の前に用いられる‘나(僕)、저(私)、네(君)’と相補的分布をなしている。そのうち、‘내、제’は‘나+ |、저+ |’に分解することが出来る。この‘|’は中世韓国語(10世紀初~16世紀末)における主格助詞である。現代韓国語には主格助詞が‘이/가(が)’二つあり、‘이’は前に来る名詞が子音で終わる場合に、‘가’はそれが母音で終わる場合にそれぞれ用いられているが、韓国語において主格助詞‘가’が出現するのは16世紀末である。その前の時代までの主格助詞は‘이’のみで、‘법(法) 이、공자(孔子) |’のように、子音の後には‘이’が、母音の後には‘|’がそれぞれ

れ用いられていた。なお、主格助詞「이」は所有格助詞「이」(現代語では「의(の)»)と同形であったため、形態の面からは區別が付かなかったのであるが、中世韓國語は聲調言語であったので、それが「나+ | > 내(主格:去聲/所有格:平聲)、자+ | > 제(主格:上聲/所有格:平聲)」のように弁別されていた(安秉禧1967)。しかし、韓國語における聲調は6世紀中頃に消失し(李基文1990)、そのような弁別が出来なくなる。その後、主格助詞「가」が出現し、主格の「내、제」は「내 가(僕が)、제 가(私が)」のように使われ、所有格の「내、제」はそのままの形で冠形詞として使われるようになる。そのため、現代語では「내、제」が1語として認識されているのである。「내(君)」も同じ脈絡で捉えられると思われる。

次に韓國語には日本語の「誰」に当たる語が「누구、아무」2語あるが、下記の例のように、「누구」は未知の場合に、「아무」は不定の場合にそれぞれ用いられる。このように、人称代名詞においても不定を表わす語が用意されているのは韓國語の特徴であるといえる。

- c. 처음으로 받은 이 통지표를 누구보다 먼저 로키에게 보여줘야겠다고 걱정했었고
(この、初めての通信簿を、誰よりも先にロッキーに見せなきゃ、と思ってたし) — (未知)
- d. 말을 하는 사람은 아무도 없었다.(話をしている人は、誰もいなかった。) — (不定)

なお、この意味分野の韓國語には「이 아이(この子)」から縮約された「애」のような語があるが、「아이>애(子)、어린이>어린애(子供)、여자아이>여자애(女の子)」のような語は縮約される前と後の語が両方含まれている。このように、韓國語では短母音が連なるとそれが結合して語形が短くなる傾向がある。この現象は特に口語において著しい(박홍길 1997)。

5. おわりに

本稿では、文字通り語の集合としての語彙を對象とする語彙總体論に主眼を置き、語彙の數量的側面や品詞別・語種別の構成といった、従來の語彙總体論の観点からは、言語間の語彙の比較において、語彙の一般的特徴や程度の差くらいしか捉えることが出来ず、語の集合としての語彙を比較・分析する方法としては限界があることを指摘した。また、その原因は、従來の語彙總体論が語彙の數量的側面にのみ注目したことにあることを明らかにした。

一方、比較語彙研究の意味分野別構造分析法は語彙の持つ基本的性格である意味的側面と數量的側面の両方を活かせる分析法であり、本稿の分析からも明らかのように、この分析法によれば、従來の語彙總体論の観点からは捉えられない差を指摘することが出来る。

ここに比較語彙研究の意義および有効性があるといえよう。

しかし、意味分野別構造分析法による差の指摘よりも大事なはその原因の究明であるが、本稿は比較語彙研究の有効性を示すことが目的だったので、幾つかの意味分野における差の原因にしか触れていない。さらに詳細に原因を探る必要がある。それが実現すれば、韓国語と日本語の語彙の特徴をより詳しく記述できるのみでなく、言語(特に、語の「意味」)にはその言語集団の文化が大きく反映されていることを考えると、文化の差の指摘も可能になると思われる。これが比較語彙研究の究極的な目的であるが、何れも今後の課題としたい。

【参考文献】

- 김난주 옮김(2000)『창가의 토토』, 프로메테우스 출판사
- 黒柳徹子(1984)『窓ぎわのトットちゃん』, 講談社文庫
- 國立國語研究所(1964)『分類語彙表』, 大日本図書

- 金光海(1989)『고유어와 한자어의 대응 현상』, 國語學會. p.104-111
- 김광혜(1995)『어휘연구의 실제와 응용』, 집문당. p.191-194
- 남기심· 고영근(1985)『표준 국어문법론 개정판』, 塔出版社. p.42-44
- 박홍길(1997)『어휘 변화의 원인별 연구』, 한국문화사. p.184-185
- 安秉禧(1967)『韓國語發達史 中·文法史』, 『韓國文化史大系V 言語·文學史』 高麗大學校 民族文化研究所. p.196-197
- 유안기(1990)『중학교 국어 교과서 어휘 분석 연구-1학년 교과서를 중심으로-』, 성신여자대학교 교육대학원 석사학위논문. p.24-27
- 李基文(1990)『國語音韻史研究』, 國語學會. p.152-153

- 淺見徹(1971)『古代の語彙II』, 『講座國語史3 語彙史』, 大修館書店. p.75-165
- 大野晋(1956)『基本語彙に關する二三の研究-日本の古典文學作品に於ける-』, 『國語學』24. p.34-46
- 樺島忠夫(1954)『現代文における品詞の比率とその増減の要因について』, 『國語學』18. p.15-20
- 樺島忠夫(1955)『類別した品詞の比率に見られる規則性』, 『國語國文』250. p.55-57
- 阪倉篤義(1960)『万葉語彙の構造-(その一)名詞について-』, 『万葉』34. p.75-85
- 佐藤亨(1993)『日本語の語彙体系と漢語・漢字』, 『日本語學』12-7. p.8-10
- 申玟澈 (2001)『日韓語彙の比較研究-「小學生基本語彙」を對象として-』, 『開發·文化叢書7 比較語彙研究の試み7』, 名古屋大學大學院國際開發研究科. p.5-42

- ・杉本つとむ・岩淵匡編(1994)『日本語學辭典』, おうふう. p.147
- ・田島毓堂(1986)「語の單位-語彙論的見地から-」, 『松村博司先生喜壽記念國語國文學論集』, 右文書院. p.515-516
- ・田島毓堂(1992)「語彙論の課題-集団的規範と個別的實現-」, 『名古屋大學國語國文學』71
- ・田島毓堂 (2000) 「コード付けの諸問題-單語コードと語素コード・比較語彙論のために(その4)-」, 『開發・文化叢書35 比較語彙研究の試み5』, 名古屋大學大學院國際開發研究科. p.247-266
- ・田島毓堂・廣瀨英史 (1997) 「語素コードに関する提案-比較語彙論のために(その2)-」, 『「語彙研究法」報告2 語彙研究の可能性』, 名古屋大學大學院文學研究科. p.63-75
- ・田中章夫(1978)『國語語彙論』, 明治書院 p.24-29, p.34-35
- ・林大監修・宮島達夫他編(1982)『図説日本語』, 角川書店. p.80
- ・廣瀨英史(2000)「比較語彙論的方法による語彙研究の可能性とその方法」, 『開發・文化叢書31 比較語彙研究の試み4』, 名古屋大學大學院國際開發研究科 p.123-139

K C I

要 旨

本稿は、比較語彙研究の有効性を示すために、『窓ぎわのトットちゃん』とその韓国語譯の語彙を對象として、比較語彙研究の主たる分析法である意味分野別構造分析法により、韓国語と日本語の語彙比較を行ったものである。

比較語彙研究の主な關心は、文字通り語の集合としての語彙を對象とする語彙總体論にあるが、従來の語彙總体論では、「Zipfの法則」に代表される語彙の一般の特徴、「樺島の法則」と「大野の法則」による語彙の品詞別構成と文体との関係、また、語彙の語種別構成に見られる特徴などを明らかにしている。しかし、何れの観点からも語彙同士の比較において各々の語彙の特徴を探るには限界がある。その原因は、語の集合としての語彙にはその基本的性格として意味性と數量性があるが、従來の語彙總体論では語彙の數量的側面にのみ注目したことにある。

一方、語彙の構成要素である個々の語に『分類語彙表』の意味コードを与え、それを集計すれば意味の數量化が可能になる。このようにして集計された、コード別の構成比を手掛かりにして分析を行うのが、比較語彙研究の意味分野別構造分析法である。

比較語彙研究では、従來の語彙總体論とは違い、意味分野別構造分析法により、語彙の意味性と數量性の兩方を活かした分析を行うので、比較對象となる各々の語彙の特徴をさらに詳しく記述することが出来る。實際に、本稿の分析においても、従來の語彙總体論の方法からは捉えられない、色々な意味分野における差を指摘することが出来た。ここに比較語彙研究の意義および有効性がある。

なお、本稿の目的は比較語彙研究の有効性を示すことにあつたので、差の生じた意味分野のうち、韓国語と日本語の言語構造の違いが見られた幾つかの意味分野について述べるに留めたが、さらに詳細な原因の究明は今後の課題である。それが實現すれば、韓国語と日本語の語彙の實體および特徴をより詳しく記述できるのみでなく、言語(特に、語の「意味」)にはその言語集團の文化が大きく反映されていることを考えると、比較語彙研究が究極的な目的としている文化の差の指摘も可能になると思われる。

キーワード：語彙・語彙元素論・語彙總体論・比較語彙研究・Zipfの法則・樺島の法則
・大野の法則・語種別構成・意味分野別構造分析法

투 고 : 2004. 11. 30
1차 심사 : 2004. 12. 11
2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (306-791) 대전시 대덕구 오정동 133 한남대학교 일어일문학과

電 話 : 042-629-7332

e-mail : mcshin68@hanmail.net